

「介護実習の意義と目的」視点格差の現状報告と課題

— 訪問介護員養成研修 1 級, 2 級課程 —

The Meaning and Purpose of Care Work Practice: Report on the Disparity of Care Facilities' Willingness to Use Practicum Students Seeking the 1st or 2nd Grade Home Helper License

(2011年3月31日受理)

寺山 節子 畑 晶子
Setsuko Terayama Akiko Hata

Key words : 実習生, 指導者, 養成研修, 訪問介護員 1 級, 2 級

要 旨

本稿は、中国短期大学で「訪問介護員養成研修 1 級課程, 2 級課程養成研修」の施設実習をさせて頂いた合計34施設を対象に、アンケート調査を実施し、「介護実習の意義と目的」について再考・検討したものである。

この調査の実施理由は、ここ数年、学生の実習報告から興味深い意見が聞かれるようになり、依頼した施設の上記養成研修の実習内容や指導者の指導方法について、施設（事業所）間において、格差が見られるということに筆者は大変興味と関心を持ったからである。

介護に対する価値観や魅力、また、やりがいや使命感などを実習中に見い出しながら、意義のある実習にするためには、実習生の目的意識と実習態度は勿論だが、実習施設側（受け入れ側）の実習に関する理解や協力によることも大きな位置をしめていることがこのアンケート調査から示唆された。

指導者に自分の将来を重ね、一人でも多くの介護員がこの実習中に育成されるような養成研修のあり方を再考するための一助にこの調査がなればと思い報告する。

I はじめに

「介護」の本質を、学生たちに伝える時に、私が口癖にしているいくつかの言葉がある。そのうちのひとつは、「利用者本位の介護の提供」だ。しかし、学生たちは容赦なく「先生が授業で教えてくれたことは理想論に近く、実際の介護現場は、劣悪な状況だ」と、私に言葉で立ち向かってくる。学生たちにこう言われ続けて何年が過ぎただろう。私も負けずに次の言葉を用意して、「理想と現実とのギャップに失望するのではなく、自らがその世界に飛び込んで、ギャップを埋める職業人になればいいのだ」と、学生たちを叱咤激励するが、学生たちの反応はマイナスに働くことが多い。

それでも、その内の何人かが卒業後介護の仕事を選ん

で飛び込んでくれるが、早い時期にバーンアウトする現実を嫌ほど見てきた。

介護の仕事は奥が深い。その奥が深い仕事を理解し、支えてくれる人材（人財）になってほしいと私は学生たちにいつも思っ止まない。しかし、学生たちは「介護実習」でつまづいている。実際に職業に就くどころの話ではないようである。

介護実習から帰って来た学生たちが、次々に口にして報告してくれることは、自分たちがあまり歓迎されなかったという現実である。

介護実習は、「学校と介護現場を結びつけ、知識を技術や能力に転換していく場である」と、大阪市立大学大学院教授白澤政和氏は述べている。同時に、学生たちは、お世話になる実習施設指導者の介護力や豊かな人間性に

触れ、養成校側の講義（授業）だけでは学びきれなかったことを、実際の現場（施設）で体験し、介護現場の仕事の価値観や魅力を味わってほしいと私は願っている。

ある施設の指導者が、「学校の講義で高齢者のことを学ぶが、例えば実際の高齢者の皮膚はとても柔らかくて薄くて傷つきやすい。学生たちは、高齢者と手を繋いでみてはじめて想像以上にそのもろさに驚く。それが介護実習の大きな意味である。」と言った。印象深い言葉である。

意義ある介護実習になるためには、実習施設側と養成校側がしっかりと話し合い、その目的と、介護の知識・技術の展開の仕方、専門職としての価値観・倫理観の確認など、ぶれることなく、格差なく体験・実施されるよう工夫が大切だと思った。

後になったが、筆者は上記のような事柄に対し、大変失礼だが、展開されていく実習のその意味が施設によって格差があることに着目した。そのことは、学生の実習報告会で明らかであった。

そこで、「訪問介護員養成研修2級課程」でお世話になった24施設、「訪問介護員養成研修1級課程」でお世話になった9施設に対してアンケート調査を実施し、介護実習のもつその意義と目的、また、施設間の視点の格差について確認した。そして、同時に、改めて実習がもつその意義と課題についても再考・追求したい。

II 研究の目的

訪問介護員養成研修（現場の介護実習）は、「岡山県訪問介護員養成研修指定要綱」に次のような目標を持つと書かれている。

- ①社会福祉の各分野への統合を深め検証する。
- ②社会福祉の知識・技術を介護現場の実践をとおして統合する。
- ③スーパーバイザー（指導者）からの指導をとおして職業倫理を身につける。
- ④福祉専門職への自覚を高める。
- ⑤理論を介護現場の実践をとおして検証し、体験の概念化・理論化の訓練をする。 以上

上記要綱からも分かるように、実習は、限りなく実習生側の立場を理解したものの上に存在し、スーパーバイ

ザーの指導を受けながら利用者との関わり合いの中で、介護職の重み・価値を体得し、福祉専門職への自覚を高めていくものであると考える。

講義や演習の授業が終了後、1級課程は10日間、2級課程は4日間の現場での介護実習がある。限られた、しかも短期間の時間の中で、意義のある実習にするには、養成校側と実習施設側が養成研修の内容について理解し、その目指さなければならない目標に向かって進んでいくことが大切だと思う。

例えば、実習依頼した施設の中で、事前にオリエンテーションを実施しているところがある。（実習日以外に実施）それは、実際に実習に入る前に施設内の見学や説明があり、学生たちもそこで質問が出来、実習前に不安が取り除かれスムーズな実習が出来たと報告がある。

また、その施設は実習生専門の指導者を配置し、指導に当たっている。その目的は、マンパワーへの協力だという。

養成校側からはそのことを強制出来ないが、実習終了後の学生たちの報告会では、その施設への評価は高い。

養成校側は養成研修の要綱に基づき、実習させて頂く施設に説明と同意を繰り返しながら実習内容のカリキュラムやタイムテーブルを作り上げて行くことに努力をしている。しかし、施設の特長や、指導者のスキルによって少しずつ「視点」の格差が生まれてくる。

今回のアンケートの実施は、その格差の原因はどこにあるのか、また、どのようなことなのか、養成校側が作成した資料や説明で解決出来るものなのかなど、その現状を把握し解決につなげて行くことを目的とするために実施した。

III 研究の方法

- (1) 対象 訪問介護員養成研修2級課程
実習施設（24施設）
訪問介護員養成研修1級課程
実習施設（10施設）
- (2) 期間 平成22年3月（2級課程）
平成23年2月（1級課程）
- (3) 調査方法
対象となる施設に「介護実習の意義と目的

について」というアンケート調査を実施し無記名で回収した。(解答者は主に実習指導者または施設長)

(4) 調査の回収

1 級課程, 2 級課程ともに回収率は100%

IV 結果と考察

アンケートの結果を, それぞれ図1～図8, 表1～表2に示す。なお, 訪問介護員養成研修2級課程を以下2級課程とし, 訪問介護員養成研修1級課程を以下1級課程とする。

まず, 1 級課程, 2 級課程の各施設に「実習生受け入れに関して制限があるかどうか」という(アンケート問3)に対し, 1 級課程は50%の施設に制限があると答えた。2 級課程は, 63%であった。(図1)

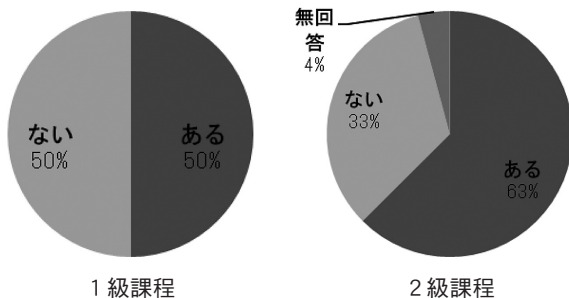


図1 実習生受け入れに制限があるか

2 級課程において, 制限があるその理由について, 「実習生が出身地の学生であれば受け入れるが, その他の在住であれば断わっている」という意見が多かったのが特徴である。

また, 受け入れた理由については1 級課程, 2 級課程をそれぞれ(アンケート問7)次に列記する。(表1)

表1 実習生を受け入れた理由

(1 級課程)

- ・学生が勉強したいと思っているならその場を提供したいため
- ・認知症介護の現場を生で体験してほしいため
- ・人材育成・地域貢献のため
- ・福祉(介護)人材育成についてその重要性を認識しているため
- ・実習生を指導すると職員のスキルアップにつながるため
- ・実際の介護の現場を知ってもらい努力していることを知ってほしいため

(2 級課程)

- ・日常的に行っている業務や考え方を自らが見直す機会になるため
- ・職員の良い刺激になるため
- ・受け入れることについて社会的使命だと思っているため
- ・福祉業界の人材育成のため
- ・福祉に興味を持ってもらうため実習場所を提供したいため
- ・介護の仕事に興味を持ってもらいたいため
- ・管理職の指示のため
- ・指導者他の刺激になるため
- ・地域貢献・社会貢献のため
- ・当法人の役割だと思っているため
- ・人材育成に長年関わっているため
- ・資格取得に対する協力だと思っているため
- ・マンパワーの増加への協力のため
- ・実際の現場を体験することは, 教本以上の学びがあると思うから
- ・できるだけ良い印象を持ってもらい次に繋げたいため
- ・介護従事者の不足状況に貢献したいため
- ・初心に戻り指導する機会が得られるため
- ・就職を考えてくれるきっかけになることを期待しているため

図2は、実習の概要を知っているか・知らないかを(アンケート問8)聞いた結果である。1級課程は知っていると答えた施設は100%であった。

2級課程は、83%の施設が知っていると答え、9%の施設が知らないと答えた。(無回答8%)

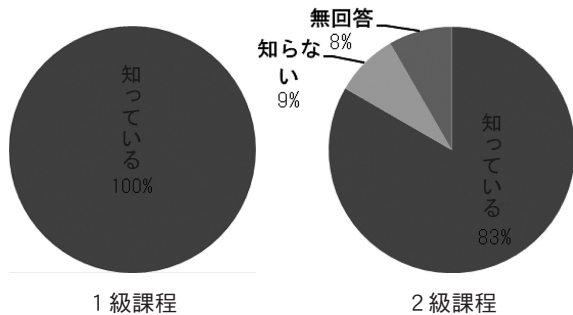


図2 実習の概要を知っているか

実習の概要を知った方法については、「養成校側が用意した養成研修の資料による」と答えた施設が多くを占めた。その結果は図3のとおりである。(アンケート問9)

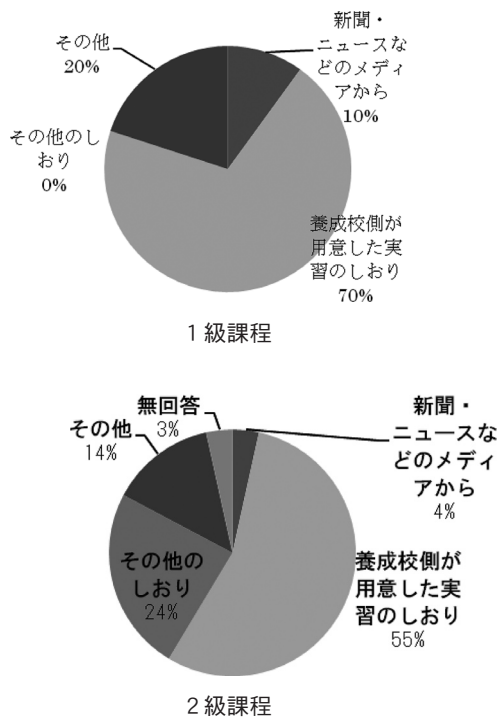


図3 実習概要を知った方法

また、「養成校側が準備した資料の内容は十分だったか」という問い(アンケート問13)に対し、1級課程は100%の施設が十分だと答えた。2級課程は、83%の

施設が十分だと答え、十分ではなかったと答えた施設が9%であった(無回答8%)。

実際に実習をさせて頂く施設へ送付又は持参させて頂く資料については養成校側が独自に作成したものを使用して頂く形をとっている。内容は次に列記する。

- ・実習のしおり
- ・実習事前課題
- ・実習日誌
- ・実習評価表
- ・個人票及び健康診断表

実習(学生の指導)は、主に指導者に負担がかかるが、しかし、学生は他の職員ともかわりを持つ。全体の指導をして頂く指導者の発言と、実際に担当して頂く指導者の発言に温度差があり、戸惑うことがあるという学生の報告がある。主に担当して頂く指導者は、養成校側が持参した資料の内容を施設内の他の職員の方々にも伝えて頂き、実習期間中は、実習に関わる情報を共有して頂くのと有り難く思うが、「自分の業務をこなすことが精一杯で実習生のことまで出来ない」ため情報の共有はありえないという声も無視出来ない。

(アンケート問17)で聞いた「他の職員の実習生への協力」の結果については下記のとおりである。(図4)

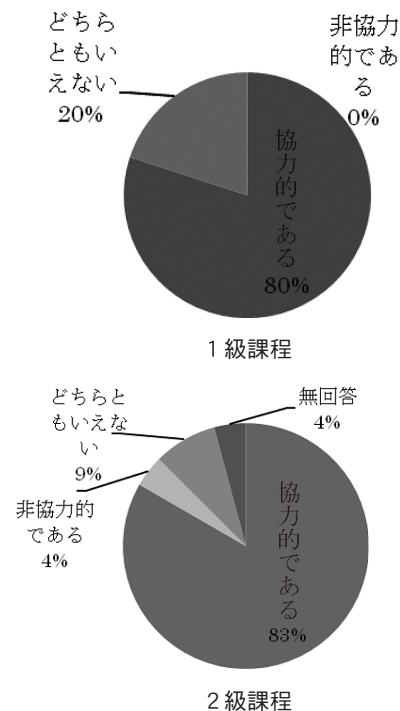


図4 他の職員は協力的であったか

また、施設入所者（利用者）の反応や様子についても大切に考えなければならない。そのことについての結果は次のとおりである。（アンケート問19）

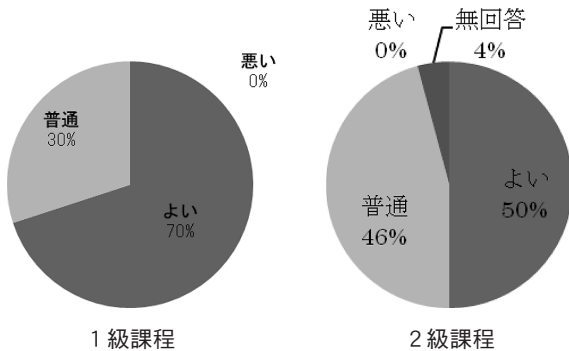


図5 施設入所者の様子

1級課程は、「良い」が70%、普通が30%。2級課程は、「良い」が50%、「普通」が46%（無回答4%）である。それぞれの理由を列記する。

表2 施設入所者（利用者）の反応

「良い」理由（1級課程）

- ・いつもと違う人が来ることで入所者に張りが見られる
- ・入所者に笑顔や嬉しそうな表情が見られる
- ・孫のように会話をして話を聴いてもらっている
- ・自分の人生観を孫に聴かせるように話している
- ・普段と違う会話ができています
- ・新鮮な様子である
- ・勉強している人に協力したいという思いが起こる
- ・若い人と交流する機会が普段無いので喜ぶ
- ・若い人と話をすると元気になる
- ・自分の得意なことを実習生に話し、得意そうにしている
- ・若い実習生が来るのを心待ちにしている
- ・話をする人がいない人にとっては実習生は楽しみのひとつ
- ・学ぶ姿勢や意欲がある実習生を見ると喜ぶ
- ・実習生に興味を持ち質問や、コミュニケーションを積極的にとっていた
- ・若い人にはいつもよりゆっくりとした空気が流れる

「普通」理由（1級課程）

- ・自宅でサービスを受けている方は、おおむね他人を家に入れることに抵抗を感じているので、かなり緊張される
- ・受け入れの難しい利用者の所には同行しないので・・・
- ・当日了解を得て訪問するので何も聞かれない

「良い」理由（2級課程）

- ・いつもと違う人が来るのが嬉しい様子
- ・実習生の性格が明るく、中には場を和ませる人もいた
- ・利用者も職員も刺激になる
- ・孫のように会話をして楽しそうだった
- ・若い人との会話は元気が出る
- ・普段は若い人との交流が無く、喜んでいる
- ・新鮮
- ・よく気がつく実習生だったので明るくなった
- ・学ぶ姿勢に意欲が感じられ喜ぶ

「普通」理由（2級課程）

- ・コミュニケーションが出来る人ばかりじゃないので
- ・実習生の訪問を拒否する人が増えた
- ・利用者のほうから質問などをして良かった。
- ・精神的・肉体的に落ち着いている人ばかりの訪問になるので、本当の意味で良い実習になるのかどうかわからない
- ・話題を利用者が考えないといけない場合疲れるので次から拒否される
- ・介護職員の養成に理解があり協力してくれる
- ・実習生に慣れている
- ・とても喜んでくれる人もいるが、迷惑をかけている人もいる
- ・実習生の態度や性格にもよる

アンケート結果から1級課程も2級課程も、施設入所

者（利用者）の受け入れが悪いといった結果はなかった。

その特徴として、「施設」の場合は無いが、「在宅」の場合の訪問については、受け入れが悪い利用者については、実習生を連れていかないという配慮が前もってできているからだと答えていることからそのことが理解できる。全体の印象としては、高齢の方々からすれば、若い実習生は自分の孫のような存在であることから、明るくなったり、話かけたりと協力的な様子が伺えた。ただ、その結果は、実習生の実習態度にも大いに影響があることもアンケートの結果から分かった。

実習は実習中指導者から指導を受け、先にもふれたように介護の技術や方法を学んだり、現場でしか感じ取れない介護職員の職業観や倫理観などを感じ取ったりするが、利用者が自分たちを身体全体で受け入れてくれたこと、その意味を感じることもまた、介護実習の大きな意義なのではないだろうか。

図6（アンケート問22）、図7（アンケート問23）、図8（アンケート問25）の結果については次のとおりである。

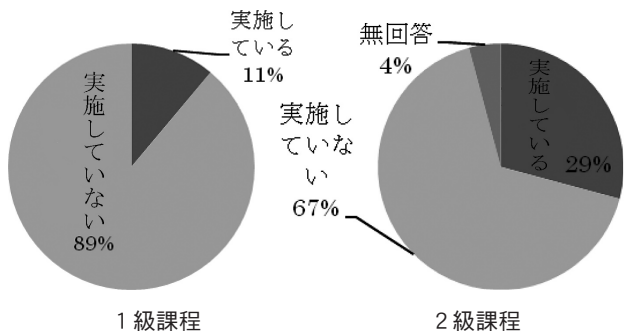


図6 事前オリエンテーションを実施しているか

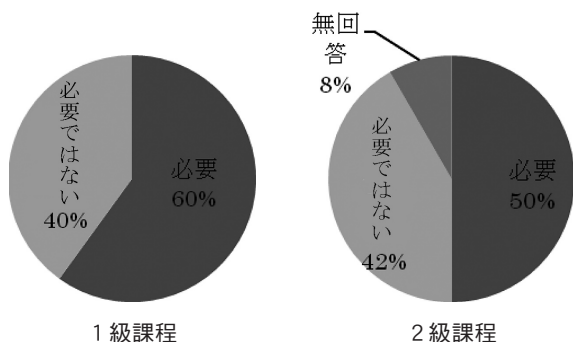


図7 事前オリエンテーションが必要と思うか

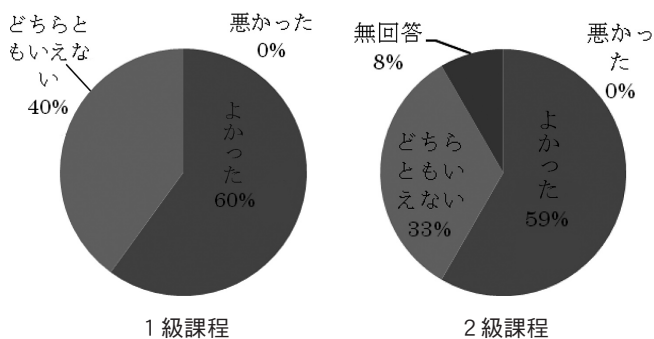


図8 実習生を受け入れて良かったか

図6の結果であるが、事前にオリエンテーションを実施している施設はかなり少なく、1級課程は11%、2級課程は29%であった。また、その必要性については、1級課程60%、2級課程50%の施設が感じている。それぞれの理由については次のとおりである。

1級課程・2級課程共に「少しでも、施設の様子が分かると思習生が当日楽だと思うから・実習時間が短いので、事前にオリエンテーションを実施し、当日はすぐに実習に入りたい・実習生が当日リラックスして実習に臨める・利用者の説明を別の日に前もって実施した方がスムーズな実習ができる」などの理由で必要性を感じている。また、逆に必要でないと答えた施設は、「実習日当日に実施しても特に問題が無かった・養成校で十分なオリエンテーションをしているので必要ない・オリエンテーションは養成校側で責任を持って行うべきである・必要だと思うが現場ではなかなか時間が取れない」などの理由で必要でないと感じているようである。

最後に、図8は、「訪問介護員養成研修において、実習生を受け入れて良かったか（アンケート問25）」という結果を表したものである。1級課程は60%、2級課程は50%の施設が受け入れて良かったと答えた。

まず、1級課程の理由は、「熱心な実習生の刺激を受け職員が自分の仕事の重要さを再認識した・スタッフが緊張感を味わい身が引き締まった・お互いに勉強になった・実習に来てくれた人が就職してくれた・スタッフの仕事の振り返りになった」である。

2級課程は、「スタッフの育成になる・入所者と話をしてくれるので良い・指導にあたった職員の質の向上が臨めた・人材確保ができた・質問を受けたことから技術の振り返りになった・若い人の考えが聞かせてもらえて

その違いについて考えさせられた・実習生が書いた記録を見て指摘され反省させられた」などである。1級課程・2級課程共に受け入れて悪かったという施設はなかったが、「どちらとも言えない」という理由の中には、「やはり職員に迷惑がかかる・職員、利用者の負担を考えたら受け入れを辞めたい・中には利用者の苦情の対象になる実習生もいる・就職に繋がらないので実習の意味がない」などの理由は真摯に受け止めなければならないことだと思う。

V ま と め

超高齢化社会対策として、特に訪問介護員養成研修2級課程の資格取得を希望する者が増えた。

福祉・介護に興味関心をもち、自らの将来を考え志す者・身近な人からの影響を受け気持ちを膨らませチャレンジする者・単に資格取得を目標にする者・福祉・介護の仕事を理解しないまま進路を決定してきた者などその動機はさまざまである。しかし、このことは、授業中の学生たちの学びに対する姿勢に大いに影響がある。養成校（養成施設）側は、わが国の社会福祉の前進を担って福祉・介護現場に職を見出す学生たちを教育（養成）している。

学内の講義や演習の授業を終了して学生たちはいよいよ介護実習に出る。実習に出ても迷惑がかからないように指導をするが、なかなか思うようにはいかない。

訪問介護員1級課程の養成研修においては、84時間、また、2級課程においては、30時間の介護の現場での実習が義務付けられているが、実習施設での具体的な介護技術の学びに入る前に、学生は1日目にコミュニケーションの取り方をつまずく。介護は全てコミュニケーションから始まる。身体的、精神的、社会的な障がい起因するさまざまな問題をかかえている要介護者にとって、有効な自立支援を行うためには、実はこのコミュニケーションは基本的介護技術と考えなければならない。

実習施設側の格差を指摘する前に、養成校側の学生に対する指導をもっときちんとして欲しいとお叱りを受けそうである。

介護現場では、多岐に渡った介護の技術が展開されている。実習を終えた学生は、「施設で教えて頂いた介護

方法は学校で習った方法と全く違う」「学校で習ってきたのではないのかと叱られた」と担当教員によく訴える。まとめにおいて長々と理屈を述べたが、私はこう思うのである。本来介護の方法は利用者の状況や、環境によって当然違うものである。10人利用者が居れば、10通りの介護方法があつて当然だと。学生に対して「方法が違う」と叱責する施設より、何故このような方法をとるのかその理由や根拠（エビデンス）を理解し学んでほしいと指導して頂く施設が有り難いと感じる。

訪問介護員養成研修の要綱は準備されているものの、この度の調査は、スポットライトをどこにあてるのかをもう一度考え、現在の学生の傾向と、施設側が目指す到達目標との格差、また施設間の格差をどのようにして埋めるのか、また、有効な学びができるような工夫とは何なのかを探ってきた。

現場での介護実習体験を終え、実践体験の概念化・理論化の訓練の前に、福祉専門職への自覚を高め、「介護の仕事がますます好きになった」という体験が、最後の施設実習でできたこと、そんなことを望んではいけないのだろうか。

最初抱いていた資格取得への動機の変化に、この介護実習がどう繋がっていくのかこのアンケート調査の結果が、その一助となり、今後の課題の発見に繋がると有り難く思う。

VI 参 考 文 献

- 1) (社)日本介護福祉士養成施設協会神奈川県連絡協議会(編集):介護っていいなあ!中央法規1996
- 2) 岡本榮一他(編):福祉実習ハンドブック 中央法規出版 1997
- 3) 訪問介護員養成研修ハンドブック編集委員会(編):訪問介護員(ホームヘルパー)養成研修ハンドブックヘルパーテキストガイドライン中央法規出版 2000
- 4) 横尾英子(編集):訪問介護実習ハンドブック 中央法規 2000
- 5) 社会福祉法人東京都社会福祉協議会(編):大学と施設をつなぐ介護等体験プログラム 筒井書房 2002

- 6) 訪問介護実習研究会(編集)：介護福祉士のための訪問介護実習 中央法規 2003
- 7) 久田則夫(著)：どうすれば福祉のプロになれるか 中央法規 2004
- 8) 白澤政和(監修) 牧野香織(著)：介護実習安心ガイド ひかりのくに2004
- 8) 寺山節子(著)：体験実習の意味 ～実習先で得るもの失うもの～ 岡山県介護福祉士会 2006
- 9) 西口初江(編著)：介護福祉 千代田出版 2007
- 10) 財団法人社会福祉振興・試験センター：介護福祉 2009秋季号
- 11) ホームヘルパー養成研修テキスト作成委員会(編集)：訪問介護員(ホームヘルパー)養成研修テキスト2級課程 財団法人長寿社会開発センター 2010
- 12) ホームヘルパー養成研修テキスト作成委員会(編集)：訪問介護員(ホームヘルパー)養成研修テキスト1級課程 財団法人長寿社会開発センター 2010
- 13) 訪問介護員養成研修2級課程テキスト編集委員会(編集)：ホームヘルパー 2級課程テキスト TEXT 15財団法人介護労働安定センター 2010